



0

150 cm

10

SEKISUI JUSHI

20

10

612

シ

4

612

シ

4



續世迷第二

とくらみのすま

なづかきめぐらすよりう

足のまづ

よもぎのまづ

ひさませぬ

ぬまづき

とうづのまづ

白川の花宴
鳥羽の津聲

まのまへ

まのまへ
みのまへとまへせひてのちせ中
たまへてよよくわゆくまづひふ
うれしきりとけいだくゆふ
えじらきおりそおりゆり
石清めぬけを含みと寧れ清めのす
りたとあめらとめのむかゆ
しゆり佛のアラモリ
アリキタマヘアラムヒタシカムア
アリキタマヘアラムヒタシカムア

まくせぬと云ふ事まさるを記傳する
くわゆるのりとてれなむをすまう
ゆうりと日吉の御事へとせらを
ほくは花嫁とあらびと行のみ
らうすとてとくせりとくとよ
くみのととてなくせりとくとよ
くとえの御はれはまくとよ
御はれはまくとよ
とれ御はれはまくとよ
りくとくとくとよ

きくとくみとくとくとくとく
行はれとくとくとくとくとく
せりとくとくとくとくとくとく
らとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとく

松風の下に宿す事あれば
のう十年もまことにかく
ほせぬつづきつづきとおもひ
てゐるといふ事も珍
らしく思はる事も珍
りであります。おもひ
をこなして終ておあえ
ぬ事ある事、雪舟がいとせん
りとゆくとせ中とゆくとせん
らうかうかとせんらうかうかの事

よしとせんらうかうかの事
せとだらうを行ひてひりてす
とくゆうの足してゆく事
とやぢりとせんらうかうかの事
とくとせんらうかうかの事
たけゆく小ゆくとせんらうかうか
女花にじますの一品の事やとせんらうかうか
絶えぬ事とせんらうかうかの事

とおもひてあつたがまにかえて
たゞうらやまにまつたるゝせり
わが身をみるゝをばまほのう
うううてゆきはりふらはの
くわらをゆきはりふらはの
くわらをゆきはりふらはの
くわらをゆきはりふらはの
くわらをゆきはりふらはの
くわらをゆきはりふらはの
くわらをゆきはりふらはの
くわらをゆきはりふらはの
くわらをゆきはりふらはの

よそいりせぬとむかへり
寝城よせとゆきはりふらはの
くわらをゆきはりふらはの
くわらをゆきはりふらはの
くわらをゆきはりふらはの
くわらをゆきはりふらはの
くわらをゆきはりふらはの
くわらをゆきはりふらはの
くわらをゆきはりふらはの
くわらをゆきはりふらはの

ひみこのよしよしゆけり

のすらと見ゆるをうそううかり勝花
宿主とまくまくうかうりふ真言ひ
詠ねまくまく僧侶のまむら
えもん一人まきひくまほのけ
たのうううううううううう
詠春のむくはううううううう
うううううううううううう
うううううううううううう
うううううううううううう

まことうりきりうとやうくゆふじよふ
のまきかはのねきのうめうてまくい
まくいひきとくせでみとう
むじせらをけりふまくいのまくい
ゆくの鏡のまくいのまくい
まくいとたまいて、まくいとせ
あそらふまくいせまくいとまくい言
のまくいとまくいとまくいせ
まくいとまくいとまくいせ
儀のまくいとまくい

あきせりてゐる。あくびひきりす
まくらよ枕樂と覺寧とさきをくほ
じの竹をわざわざみみ、
けりゆすも日ひには花は一朝あま
をもきこまへば、こめうてみうの
せうて、ひやかとみてて大鬼も
ひづかにかくにがいこのまよ
のやうふくぢま鬼のまことひま
すあまとみゆ鬼化まゆま

ひづかにかくにがいこのまよ
のやうふくぢま鬼のまことひま
すあまとみゆ鬼化まゆま
ひづかにかくにがいこのまよ
のやうふくぢま鬼のまことひま
すあまとみゆ鬼化まゆま

たり申り候る所が遠役の引當
事は御承とりて候ふ
からしてやうに中門廊
わざりりつてのうへあた
そとまのうりよを承りりて
れらひそりとやたる申り
石井二条西園院なりりき
とつりのうりかうてけみく
くわくとひきだすあらき
るる引当のうりもとひをえ
方と申すが一いあらひ
は引当の格に通じてたもの
ひりうらめやうとひきく
もくのうりてひりとひきく
くあらめうりのたの申すら
きがうりよこひもひきく
けくわくひりうりまくしりく
うかうとひりうりめく
アのうりをひりうりめく

と丁てらをやせらをもすうんもん
とたゆりり小殿よ人ゆきはつ様
佐ゆきうとまこえー人の相よき
するかひえあらふむあらの
もまくらかすまおうやけりうじう
アマカタヒムシタリゆこの
浦門の西陽明門院とアハラ奈院の
ひじよみだりは朱雀門至るの
たれりゆ是不^ト申て
の御門とい大ニみくらもあくまくを

延喜十年二月二日室宿多^モたら

行^ハと大カミ^ミに侍候ゆせらる

とまく

しゆりのまくまくが方をとと
もととくくくくくくく

とまんもくうりり寛弘二年七月廿一日

アキラと行^ハ延喜二年二月陽明門

とまくえ^スセ行^ハ御^ハくわくとくに侍

アキラと行^ハ後朱雀門よもぐ
もうせ行

よひゆき雪井の月とすうり
うくわあくまきりともれど
すくもとめうらし、小もむれど
ぬ小もとくちき、みやたけの山代へぬを
后えみ折る。山の道を下がの
じすみせ

よひゆき

白川池にはこゑ池乃一拂よよたり
申そくは女贈を后えみすみす
大納言被信の節ひすみてたま化

のまえねく申、即恩而引
まくわゆつてまゆくは因流无事あ
云處のちくちくんでじすみてなり、みゆ
細き乃てのびてのびて被信大納言れ小方
たり、このゑくと天衣元年もとのれ
み六月廿日じすみてひと紹延天元年
卯月廿八日じすみてひと紹延
十七日乙未十二月八日位ノイセ
ソトナキに申さんく井
ゆうゆうてアツセ紹くつまのノイセ

月はほんと無理へき事を行ふ。八國の
アラシノホーの間アラカツも
セイジケイヨウナハアリ。年を以てのちセイ
モサマシム。ナカニタマセテ。年を以てのちセイ
セイナリ。甲、乙、丙十六年。シテ。ま
ヒコトセイセイナリ。近在のアリ。セイ
二十一年。モセイセイナリ。シテ。モ
ルアラシノホー。アリ。湯城院。八十一年。ナ
キ。アラシノホー。モ。アラス。セイ。シ
ウセイ。アラシノホー。アラス。モ。アラス。

セトモセセイ。アラシノホー。アラス。モ。アラス
リ。ナシ。アラシノホー。アラス。モ。アラス。モ。アラス
小。モ。アラシ。アラス。モ。アラス。モ。アラス
アラス。

アラス。アラス。アラス。アラス。アラス。アラス。
アラス。アラス。アラス。アラス。アラス。アラス。
アラス。アラス。アラス。アラス。アラス。アラス。
アラス。アラス。アラス。アラス。アラス。アラス。
アラス。アラス。アラス。アラス。アラス。アラス。

やあらうのゆきせひをれくと
てのちへとくもとくのゆく人や
けりてんりふくわれらをね
けりてんりふくわれらをね
けりてんりふくわれらをね
けりてんりふくわれらをね

りをこほりしゆくせのたがえも
このかみえとえ行へとえと
の立よだてゆくみうどく
けりてんりふくわれらをね
けりてんりふくわれらをね
けりてんりふくわれらをね
けりてんりふくわれらをね
けりてんりふくわれらをね

一りうらまひはくまんとおもひまつら
でゆきうきらうかわゆくくくく
さひまかとみせせりひる川のま
もとくまくまくまくまくまくまく
塔下とまてらと竹百竿の脚りとひな
とつねじらうせらうとむのみち
と一とよやくにまをかうぬまくま
りうりておれあまくおゆくく
一とくくくううりて一とくく
せひりう小とまきがひりくくく
かくうとくうとくうとくうとく
せひりうとくうとくうとくうとく
きううううううううううう
どりアモフ、うらうせらとくはうう
いと立場ゆゆはせらとくはうう
なうううううううううう
うううううううううう
うううううううううう
うううううううううう

まきりのいぢりてまのくはよ
うのまやあんじ川流ゆくと
上ますたゞ一里りよやつとのま
とアリハ有能のしきせ行下アシ
ちりそれりとやまとまきのわら
トまうだり和まどなくせひを終
て信みを以拾達あらわしめのち
金糸集えせまくらうとく
も申叢アシガタをありけり承保二年十
月六日大井町アシガタを終て曉

穢アシガタをあそとせ終りうなとせひを終
えぬむひの印

大井町アシガタを終と申すて
アシガタのよのよらと申すて
アシガタを終る者アシガタとてアシ
くに一申と承暦二年六月六日
敵との争合をせひを終判者アシガタの右
のむかは左文太としとせひを
終ふテ人アシガタと申よわいと申すとた
く行なうてアシガタを終ふとて

とひまくのうすきをえもつてそ
天ほのす合系廣す合とえじ
あうす合はうのとゑまて是へ行を
えううのす合とえじ
アリ朗詠集よアムサ行のうと
マ歌アムサ行のうとえ行と色あ
シテ行りまうすの十小さ月のせの
おなまの秋とくらべやよけのが
のるとえあねづくらアムサ行

あう人れんとてゐてさううりま
にゆくとれんとれんとみうとわ
えいねとしりはよに和寺へま
たうりとやせ中なかまとのがく
まきととこえ行とアムサ行
アリう文のらうせ行には性る
入道たとくふとくせんとくうの
アリモモクアリモモクのとく續
半朝もととてみまくはまとく
えくとせんとく五十節

てまくら行ひと嘉和二年二月十八日
場川の浦門鳥羽は行ませりとおぐら
のは室立十の山とおうの行
をう京人樂人乍く飯と人中かね
りまくた左の毛と行き童床と
人胡飲酒陵と納穢利をんはりうる
中小胡飲酒はまくのりまくま
い行くとておおぬさまと童れく
もくもくやあくよのよの人のよ
ともなぐちもあくまく行けうそろ

うるまくらと浦門鳥羽の大納戸と
を政事とい歎むせうとてまく
行けうそくうのうの毛と大わざ
こえ行く

ほくもせあく
うのゆすとしとあととだらを行
くとくとくあくもゆくやくもりりと
ゆくらうとく六条院理大と行まど
一人よれりとあくとだくせー 小鼓

えとひりくせの風の扇相ふへき
せ竹の風と小風からす竹の風中
小ちすうちよにらかゆるを
うとうとくひだえはとひひくひれ
ききかわさねひくひきひきひく
きくひくひくひくひくひくひく
きくひくひくひくひくひくひく
きくひくひくひくひくひくひく
きくひくひくひくひくひくひく
きくひくひくひくひくひくひく

をくんで教行ひくのを并びてな
きとくやきれひきいたとくきてみ
えとくききくにあくらふた
くゆてくらかくとくらかく
んせりを経やくとくらかくくえ
たくゆくうきのとくらかくのとく
あくま、たくらとくらとくらとく
うとうなるアあらきりとくらをとく
いあくま、うきりとくらとくらとく

絶縁する事多し。中納言は行はだの
事中納言の宣旨とて、空をもよんで、
くつろぎゆきをうへて、沙汰に任す
きこと、ゆきをあつまむるに、
申はれ候。沙汰に任す。沙汰に任す。
也、行ひうる所のあつたり。中納言
をもよんでは、沙汰に任す。沙汰に任す。
也、行ひうる所のあつたり。中納言
をもよんでは、沙汰に任す。沙汰に任す。
沙汰に任す。沙汰に任す。沙汰に任す。
益々、沙汰に任す。沙汰に任す。
益々、沙汰に任す。沙汰に任す。
益々、沙汰に任す。沙汰に任す。
益々、沙汰に任す。沙汰に任す。

せ絵けり小良真庄主
み平奉とてはれ跡のとまう
けひきとくさく小西主よこすまわら
むえのふたえのゆうりとくまきわら
升坐うりひとうまを絵かう西元
のりくじたゆと絵てとてを沖ある
りやのとくもとく人のたうと面目ある
あらとくまくわ金版の一切けせ
きくとくとくとくとくとくとくとくとく
えうえーとくとくとくとくとくとくとくとく



アリコトナムニシテ御殿との事も見え
テ有リタリハトウソウタリハトウキリ
カヨハスル由ハテナキテアリトス
セ行シテの事ハモニヤシマツクの御考
門港ノミリトムシテアリトス
トスルモヒセシケレバモトハシテ
モトノ平旦立アリトスモトナリトス
ミシシタリムの事ナリハセシの事
セシナリハシミナリ又威ナリキモニエ
聖ムキモジツ佛道の事スラトモナリ

一
山の底主導の事ハシテシム仰
テアリキリヨムシテアリトスモトナリ
キモハシテシテアリトスモトナリモ
仰ヘリトアリキリヨムシテアリトスモ
トナリセドナリセ行シテリヨムテ月
アリシテシテ仰ヘリトアリセ行シテ
モトナリセ行シテリヨムテ月
の事ナリモトナリセ行シテリヨムテ

せのをとむたるもむかはて
のをとむたるもむかはて
とあさゆまうとあさゆまう
人平氏の刑部の忠
威とくわえのたゞひよみと
さきのゆきのゆきのゆき

まくまくとく秋とく秋とく秋
とく秋とく秋とく秋
とく鳥羽流花のたゞ荷風あらわ

のりとく秋とく秋とく秋
とく秋とく秋とく秋
とく秋とく秋とく秋

とく秋とく秋とく秋
とく秋とく秋とく秋
とく秋とく秋とく秋

おまかせ

お父との申田の喜びの事とあつて

せりを終き、延久之年五月十八日是二

月をうさぎせりく升よつせし

同五年五月六日父を死んでゆく

はせぬ画忌清らきおもむき

たすくそりくのひたうんあがく

やうにむくのく升とくせり

ゆ息前の印母を余祕ふとし

たりくいづく升とそくり行

こわいまのひのひくに見えのひ

備中守

ひまく

おまかせ

柳川の水、山川のはまの水ニ申
すより一申ましませ母贈をまち貯
み申えたり申て申て申て貯め實のね
じてうぬとひな木に深根居ればやの
ゆきゆきや、みどりと葉扇と年づらひの
き二月十日しまきひをひくを

年十一月十六日くわづうせし

おみくじのひも(あてふやり)へたりほ
きりと中にゆえども見てあわせぬ
あきゆるはなをひらめくとてくらだま
いうんなどと見てしるすとてう月よ
むらむらとありがりきゆうとゆえ
くま経歎と人をかのまうとつしてす
このよゆくまちにれがたうはえとよ
せまのまゆくばかりとまくらく
くはゆめうて経きのづけむをゆき
はうへよみくまくさくまくらうて経を
くとせらき経きる家情のまくらに
の意のまくらよねりりうりとてくら
まえゆくせまくさくらむむりわすと
くまくらくまくらうてき月のうらに
く小ねりうりうりやうもじと、安
くみかねまくらんと大納戸と天井
納戸因信などとて後れうと
くくとらまのうすやうくねくやうねく
アセ、周防内行でまのまの萬能主食の
アセ、紀伊前牧主のゆうとふ皇室え

の肥後つのさみかしよとこうのせ
りきかくくくくうううえうみく
えくみてたとこのうやまなうあら川
地の絶書合とくもみのくくうゆうて
くくうへきり撰集などとくうがく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくく
房の中納きをまわりうのみの人すよ
じなうれそとくもくはうめうきの勝寺
けくらきゆりうの殿とくとくにゆう
きゆきうか後れうんとくにゆう
うあんさんとくわくうくうの花粉とく
きくくくくくくくくくのくれとく
のくを行ひうくとくくえ行うくあくふ
うあくまきん南風、仁喜殿とくとくう
けくりうち小雅とくあくまきん殿とくのま
ううとくよのりとくとくううとく
雪のくよのうとくとくのうとく

（初見の小後輩の筆跡）

卷之三

馬子内親王

じゆくのまことを數作とくらべてはひけ
うきのむすめや家集よこすとまつり
りくとゆきととくみあつされれむ
てよきすけとよき行つまつ
くわゆあらゐの脚とまかと
たまゆの馬子内親王
馬子内親王
たさかにうるまくの小でひくひく
てゆくととくやかとくひくひく
ふまゆの馬子内親王
ゆくととくの拂ふの畠
ゆのせゆととくまづくはくと
とくえりとくとくふたりゆ
とくえりとくとくふたりゆ
ゆのゆのゆのゆのゆのゆのゆ
とくえりとくとくふたりゆ

ありて此を仰りておひがひとせ
年ぬくもあせせりてあひておひ
なうほのとおひをひきゆとひらひ
まきまきのよみか山川のたのた
りのす寧わくて通後直房が人なり
てキ仲あらじふらひよりさ
そあやそれりうらのそせます
くまくらかがりふなん仰こみ
うとすまらふくせせりあわせ
まうしのうらがりすまわあり

まうのーのそせりとまうえ
こゆくかれりうゆとや人のゆき
とちくうひまくやのゆき
あくやれりゆき
こえの御寺

このいと仰母様中納言ゆきの御
じよゆの。ちゑのたのたひひじ
うたりゆ。大歎の。こひまくう
て延久と年二月九日。十五。自月
事あむだりゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

了日立年七月廿二日卯とまえ
マ佐の久のむりう終義保元年六月大
日未乃よりよもう終はど十八よれく
申う十二月廿六日前方うみをせぬ
良マ月五日郁芳門院じそれらをて
後二代のちそひのやうをせぬせぬ
四年大之ゆくみだらういきくまでう
経う無法元年九月廿二日ニ無内裏
てくわらをぬるにトハシキをえ
行一村との卯田アツムクセ終

てのう西子くまらうくわくく
たノ申りう大日佛はう終義保元年六月
アモニ余の家よもうまで祐寺
の一日をうりへのよきくうなりてきう
のりう終アツムクセ終はるち
まくまくくもくせ終はるち
りくまくうじくまくまく終は
くきらうかくせ中ノヒクレ申
アトナリ白川のアツムクセ井ノ卯は

なまくい廢朝とて二日なりの間でアリす
ものあつりともだくうきをせひする
くまのまほ人楊木丸たものゆゑひる
うんまつえひひかひきのあめり
シテの佛堂に佛をそひうて
いぢりの佛堂に佛をそひうて
いぢりの佛堂に佛をそひうて
もとまこゆの佛堂に佛をそひうて
納まひてタケヌアヒラミナウモアヒテ
山のまよせらすとてアヒキトコト
えくわ行まきひじくよ勝樂院とて

佛堂けくまて二の三日未ださかく
やアセリとひま八月ははせちばう
章行堂けくせむ仁和寺入道ま
て供奉せりと行日日醍醐とて同光院
てゆきせりと九月十五日より川の
沙幸ふくよ佛寺せりと行大二日御
正日。同ゆ寺とてそこをせひとひ
まきくわくまきゆきとせひとひ
おあねけよある(おあくよゆる
のまくらみのやだれよきのくらす

じし」と云ふ事とぞなりけり宣源
元年正月のうちを后まくらを
らせ給す(もまた)めぬるにあんた
申けり

白川の花宴

鳥羽院と白川の先帝の第一の曾孫
佛母贈宣室を后まくらを實む大
納戸の(し)まくらの(し)と康和五年
うのよの(し)一月十六日じよれり
もう八月十七日暮まであるてか承ニ

辛酉七月十九日佐久を終て承て年吉日
で元服式をほこりて六年とてかまくら
申て一のつよゆつてやうらをほこりての
ほこみのたまゆ申てきりはせ中ひゆま
きりはせと申せ給ひ八年とて
一月白川院たまゆ申て小車を
新居とてきりはせ給ひと申せ
えまくらを白川院と申せたまゆ
してのまくらのまくらを申せり

アモウカモウマヌツアタリ申
キル新車アツシテリ新車アツシテ
ミセテリ新車アツシテリ新車アツシテ
ヨコ通セセセセセセセセセセセセセ
ヤサシキモリカタムラ月作
白川のモリモリモリモリモリモリ
モリモリモリモリモリモリモリモリ
モリモリモリモリモリモリモリモリ
モリモリモリモリモリモリモリモリ
モリモリモリモリモリモリモリモリ
モリモリモリモリモリモリモリモリ

アモウカモウマヌツアタリ申
キル新車アツシテリ新車アツシテ
ミセテリ新車アツシテリ新車アツシテ
ヨコ通セセセセセセセセセセセセセ
ヤサシキモリカタムラ月作
白川のモリモリモリモリモリモリモリ
モリモリモリモリモリモリモリモリ
モリモリモリモリモリモリモリモリ
モリモリモリモリモリモリモリモリ
モリモリモリモリモリモリモリモリ
モリモリモリモリモリモリモリモリ

ゆるまうるこ、うねのくもくひ
りんくくくらとくまでゆくと、ねとの
くじらは、うもとじくをて、うら
きびりうつしめの、おまの、やのう
じうきんとえいと、車
たぬき、おねだり、小
さくとくして、まくとせよす
きくそむぎあがく、うかく
しりぬくにせんとく、やま
とかうそくのゆうかうらむか

まことにあれどもとくにいふ
まことにあらうやうに思はる
でござりぬるを思ひておるの
うておのじよがまよむるを思ひ
わざとむるを思ひておるの
すやうに思ひておるの
のひかりをいもむかしむらの
をじまとく月のやうに思ひ
みそめゆゑて花のみな
はるかに思ひておる

あはれとすとやうりあわせまつるま
いきみとひりとむのゆゑよも
のゆゑかくらへと、ひまくとくまくと
くらへぬまへて、ひまくわう様故かくに車
かく通かたとまくとまくとまくとまくとまくと
ゆくをうううは勝寺よまくを紹
てはあくいぢりて、ひまくわうのゆゑ
くまくまくまくまくまくまくまくまくまく
くまくまくまくまくまくまくまくまくまく
くまくまくまくまくまくまくまくまくまく

の節義行集よりしてゆるや
房のことを仰まつてゆる
まへ

トモシキ代のゆゑとゆゑをのき
トモシキをゆひくとゆゑ
のゆゑもあゆむやうのやうにゆ
けしゆゑをゆゑよわくとゆゑ
トモシキをゆゑよわくとゆゑ
アのうとくれ車のうとく



トモシキをゆゑよわくとゆゑ
のゆゑもあゆむやうのやうにゆ
けしゆゑをゆゑよわくとゆゑ
トモシキをゆゑよわくとゆゑ
アのうとくれ車のうとく
トモシキ代のゆゑとゆゑをのき
トモシキをゆひくとゆゑ
のゆゑもあゆむやうのやうにゆ
けしゆゑをゆゑよわくとゆゑ
トモシキをゆゑよわくとゆゑ
アのうとくれ車のうとく

はりまに一車のあまと車に
りそらでさくらんぼのうす
みつてもよしわざとて
あせもきがうひりへひうす
くもてあまゆるのゆふ
こかきしてゆうゆうゆう
ゆうときうやくうううう
りうううううううううう
ううううううううううう

功ほのちもとくらむの事とせし
勢はまかずえぬをゆせぬとて
川もよどたゞすやれりゆきん樂
をくわくわせ終はうえのねとあり
けくわくわせりゆきんのれりゆ
けくわくわせりゆきんのれりゆ
とくわくわせりゆきんのれりゆ
とくわくわせりゆきんのれりゆ
とくわくわせりゆきんのれりゆ
とくわくわせりゆきんのれりゆ
とくわくわせりゆきんのれりゆ
とくわくわせりゆきんのれりゆ

のたゞたゞやまがたまで行ひす
せうじり

かあいとよじるれ

のらでむとづからうえ

ふをせり

鳥羽の序

このはせとせせしに
一そくもうりはゆくゆくゆく
まじめ小中大のなみのまわら
竹のとくにほりてらぬまの

地くつよだりゆくはせし
小くののゑのゑと東とくまふ先
一り夜とくふゆくゆくゆくてとくの
人くまくまくまくまくまくまく
津小津車とくとくとくとくとくとく
ぬよぬりうなぐんとくとくとくとく
まくとくとくとくとくとくとくとく
ふくとくとくとくとくとくとくとく
新うわちの下鷹とくとくとくとく
マウリヒムとくとくとくとくとく

口経のゆゑの本納を口せよと上鷲な
まくらをうつて下鷲をうぶされ
じふ肉とからむてくわくせ
くわくらのゆゑよみてからくを
経がりたる鷲とてからくを
せ経へりとてからくを
なまんとからくを
のとからくを
とてからくを
とてからくを
ゆきあらすりきりとてからくを

あらざくわくとてからくを
まくらの夜あくとすとて朝被
え十方佛とせんとすと文と説せ
せぬくはのれもくとてからくを
りくはのれもくとてからくを
わくはのれもくとてからくを
のとくはのれもくとてからくを
いはのれもくとてからくを
いはのれもくとてからくを

で御座候る所の御心の如きのじ
いの堂に來せ給てと申せりを終
ははくおつて終ておもへくを
上天宮の御事よりはりけまや
御事あつて三月十日そ
鳥羽えみくわくわうひを終とす
をもとむけておもひくとす
のくきくきくきくきくきくきく
し空えとおえんとおえんと
佛事とせらを終りたりる

あまくわかとてあまく車う
をくわくやなを終ゆ事のうと
のうとくのうとくのうとくのうと
終くまの僧よひうん印布施セ
テアツのゆうとくとくとくのうと
くとくとくのゆうとくとくとくのうと
くとくとくのゆうとくとくとくのうと

はくとそくへくとしゆゆりり印ぬきせりと
絶えんよの印ぬきとしゆゆりり印
白川地にれいゆすとしゆゆりり印
このじてゆるしゆゆりり印とせりと
いとしゆゆりり印とせりと
のとしゆゆりり印とせりと
わねはだりゆるゆりり印とせりと
ゆてゆらゆるゆりり印とせりと
うてゆらゆるゆりり印とせりと
らせらをゆてゆらゆるゆりり印とせりと
て近習のと萬下萬下とそりり
そりりけたと一ゆりりと
あよひまゆゆりりとせりと
一仁平二年三月七日のとせりと
先よみゆきせらをゆくは是の五十の
聖せらをゆく等の御佛事會の
まゆゆくまゆゆくらとみゆくら
のゆくまゆくあゆゆく僧じくらのす
むまゆくたゆくてゆくとゆくまゆくま
のくらゆくまゆくまゆくまゆくまゆく

あくろりさあきやなにらう
きくまのむりやなにのすゑのる
そひのひりふかやまあらじまひりと
をくまゆせじはまほまほまほりぬ
りまのをなはせよいら
おおてくせ地のゆのまのま
のまのまのまのまのまのまのまのま
たまてたちのまひの神うまきほば
たうたけゆふたちのまほまのまほ
のまほまほまほまほまほまほまほ

渉みて胡飲酒りいよいよ
まわとまのとまきとくら終まそら
のたまとまとまと神うまきして庭
たまてまうのゆまゆま
めよゆのひりふかやまほまほ
やまほまほまほまほまほまほ
みと大ねえのまほまほまほ
りまのまほまほまほまほまほ

よやふ作りよなうてせう
よやふ作りよなうてせう
ひと絵すうありやうひとをまで
鳥旅よおうとせりきゆうの
一とよどりんちうたとりてくま
うらつまくは五十マートをだは
りゆ女贈金を后えい義連二年十一月
内よきりは席和立年五月
みよきりは席和立年五月
ひと絵すうとてくうて
ひと絵すうとくうて

アラタナ

ミル

仁和寺の女院の一作よい位わう
内も絵新地とすえひをねーのち
さかよだりゆくはとめそのみ
つとくをひを絵をねゆ女也傳
中え章よとくも實大納言の才ニ女
鳥旅院のくわよだりゆくはとめその
のゆひすうとくもくうひとくとこの
ノシえ永二年己亥五月十八日

じよきひきゆう保安元年正月廿八
日信ひけせ経た後で半領元服せりをぬ
うひそり十一は性すの事ひとその
けじよき女郎よまうひく中えよ
もうち経一室をあつたと。けじよ
たうはの移改の事女さりきのまよた
くはくは行虎鳥羽院たやかわらと
てたゞくす御女也花なぐぬくまく
れくゆふせとの侍候中細言
まことあたまを書くわざをちまつ書さ
ゆゆしたる事あきまつたと
の事の事あらかじめゆうきてつ
ねよみうれしにんあらをほのと
きあくよくひの経足とその脚の
くくきくくとつまくととだ
えんれりうやうたまうれい
ゆりゆりくくとこのおせかくある
もくのうれううしゆくのゆく
らむくわらひがくれてつね和

手の事とせりを行ひる所の事
小豆や豆の事の事とせりとあり
ねえうつてうつてはいとらうとせり
てんあめうめうめいと敵うつて
うそまくらせうつてはあそびりうつ
用ひゆくとえうれがそのれとくま
お大門とえもひきの中院の大納戸と
のゆえ右側の仮屋より小敵上ゆ
とてからまきにけりうつてまくわよ
中門大納戸家をゆえ成通す

左の道やたらとんとひだりの左の
口うんとえまくわ行席を垣門の大納戸
仰敷それ行り、護仰いた大井と称
う仰敷のいとくとめうけまくわの
うとくとあくゆのこかくと小川称
の仰敷たとえ行ふうと
とくとくとくとくとくとくとくと
あくゆとくとくとくとくとくとくと
あくゆとくとくとくとくとくとくとく

不思議と物語のよのよがある
もよもよするやうな氣分をう
たうゆえ

夏と秋の季節をいじり

月の半分のりうれ
その半分を残すやうな氣
のうじうなむきのうじ
へんこえひくあき天承二年三月
やけさん晴れ着せりとひき晴けの
うつれしりふきんけりさくま

涼風のよどりてよどりゆ
停るる足りてよどりゆた
一雨のよどりてよどりゆ
のよどりみどりよどりのよどり
らうてのよどりよどりよどり
い人のよどりよどりよどり
きらのよどりよどりよどり
やまとよどりよどりよどり

とくさんうてまくわりうだくつてらを
のく用ひ廢石のれうとうてそのふ
ひきの竹簾おほきのとくとくなうつ
よたくまくーうくまくひととくゆえあ
ーがくまくすうりすうちから竹簾相中ね
てたつりうりうりうふゆのくようう
てりくまくとよきの節くさう竹をまく
くちうひよたくまくうりうとやくく
けうけと白首の竹をくくふくぬとらせ
竹まくと白首花撰集とせうと竹とくえ
うまくとくえうせんせんまくと
はまくとくえうせんせんまくと
まくとくえうせんせんまくと
たくとくえうせんせんまくと
なくとくえうせんせんまくと
ばのゆまくとくえうせんせんまくと
ゆまくとくえうせんせんまくと
せんせんまくとくえうせんせんまくと
せんせんまくとくえうせんせんまくと
は大寺のたくとくえうせんせんまくと
うせんせんまくと

我アツ一ノとぬだな草

あづれとづれむりつてま

シテルを行ひとまえ竹

石のさわら

の女たてとしあきとすう
あらまふ不くぬすすまの女た
おれせのこのひがとすく
うせはるまくまくまくまく
う井ゆうもとまくらせ行その日
まくらまくらんまくらまくらまく

いきまくらまくらまくらまくら
むくらまくらまくらまくらまくら
の中夢十浦とすくらまくらまくら
又六位のあくじ書らげてまくらまく
くまくらまくらまくらまくらまくら
えのゆくらまくらまくらまくらまくら
きてまくらまくらまくらまくらまくら
うのれとづれとづれとづれとづれとづ
まのゆーとづれとづれとづれとづれとづ

きとくへりゆうてりゆうてりん
そのはひりゆうてりえりゆうてりん
うの御子殿より殿上人なりせり
あらきあらきまつりて新虎し
れりきこゑ西國虎しをせ修志上の
てはゆのゆきをもくらせゆて
うへりを修志ふこのおめくとくと
りを修志きいよだ一虎のいよか
てたくぬと位しを修志すめくわ
小鳥眼流傳しをくわせめくわせ月

二日ノセ乃を修志きいよだの代
モリモリわらわらのたぐい申せり
モリモリゆうとくもあますみくわら
モリモリゆうとくもあますみくわら
のゆえりあさのゆくわらゆくわら
をうとくわらのゆくわらゆくわら
ゆくわらゆくわらゆくわらゆくわら
ゆくわらゆくわらゆくわらゆくわら
ゆくわらゆくわらゆくわらゆくわら

ちうかくもうちとれきてる
たり申さんとくらむれま
よられりとみうちと人りきてる
りのうちせりとれさんこの尺との
はまらま十のとくらむれま
アツセ多くとまはづよせ終てのち
まほくのく半二十との声と
うせとゆ川流のじよもとでやま
をい下りを終けるなまくらる
りとれきて流そくしめだ
ソツソツとてがくえ絵一あり
のゆふくとてまつせりとのての
はまらまゆとくらんとうぢ
一画すに和まとけまいとせ終る
の初號をとせんとくらむ
きうちとれりとまかはとつせんと
久安元年八月廿二日とせ終る
之の月の三月よりの月の廿九日
ぬうくのくらむれま

あれへまよの見ゆまとまうり
まえみあくはまへん人より
あまなうの宿ひしとすほりまうみす
まうみえ行へのせゆの仰母の仕事も
まうみのキのせうりは二位えよとて
たうすう

九州大學圖書印

